

釣れ釣れなるままに

2009年思い出の釣行記 PART. 2

乱の冷や水

鹿島釣狂



魚種別年間身長賞を逃したソイ

岩見沢釣遊会第2回大会

☆開催日	平成21年05月17日		
☆開催場所	寿都港～千走港		
☆入釣場所	ワスリ		
☆釣果	アブラコ	380 mm	2/3
	カジカ	358 mm	2/2
	ソイ	353 mm	1/1
	ホッケ	360 mm	25
	ガヤ	250 mm	4
	ハチガラ	240 mm	2
	重量	3480 g	
☆成績	合計点数	1086	点
		7	位

装備の近代化

永年使ってきた携帯電話が来年から使用できなくなるという某電話会社からの文書が届けられた。「電話をかける」「メールを送る」ことだけは何とか操作出来るようになってきたのに、そんな不合理なことがあるのだろうか。いぶかしく思いながらもその広告に目を通すと今月中は買い換えを無料にするという文句が謳（うた）われている。それならやむを得ないかと女房に付き添われてもらいに行く。

店頭で出来るだけ簡単な操作のものはないかと捜しながらよくよく見ると、器機がタダなのではなく事務手数料が0円だとなっている。0円だけが大きく誇張されて宣伝されているので、誤魔化されてしまうのだ。機器代は、なんでも月賦で口座から引き落とされるらしい。しかも、今まで使っていたような簡単な機種は無いという。

購入したものには異常なまでに様々な機能がついている。白い犬でも話せる（某携帯電話会社の宣伝）時代になったのだから当然といえばそうなのだが……。ネットにも繋がる。テレビも見られる。音楽も配信される。ゲームも出来る。いろいろと説明されるのだがその横文字の言葉が分からない。結局、店員さんに設定のための操作をしてもらう羽目になる。まずは音量を大きくしてもらった。音が小さいのではなく私の耳が遠くなっただけなのである。画面の小さな文字を見つめていると、店員が含み笑いをしながら「文字を大きくしますか」というのでお願いする。これまでのやり取りから店員はこちらの目が霞んできたのもお見通しである。カメラで撮った映像をパソコンに繋いで印刷するためには付属品が必要だが買いますかとくる。そこまでなめられたのなら意地でも買いたくない。そう思っていると、今度は様々なサービスについて話し始めた。

使用1ヶ月間は無料だという。1ヶ月間だけ使って必要なければ契約を解除してもいいというのだ。好きな野球チームはないかと尋ねられたので「日本ハム」と答えると、これ

から日本ハム選手の活躍が時系列で配信されるという設定をしてくれた。ついでにコンサドーレを頼むとJ2情報はないという。釣り情報も得られるという。〇〇プランと言うらしいのだが無料という甘い言葉に誘惑されて設定してもらった。そのサービスのために今でも胸元で騒ぐチンチロリン、チンチロリンという呼び出し音に悩まされている。

携帯一つでかなりの情報が集まる時代なのだ。素晴らしいことなのだろうがアナログで育ってきた団塊世代のこちとらは使いこなせない。電車に乗ったが最近では新聞を広げたり単行本を読みふけていたりする姿を見かけることが少なくなってきた。電車の中で携帯が利用できるようになったらしい。周辺のお客がカチャカチャとやっている。それをチラッチラッと横目で盗み見する。メールには記号や絵文字ばかりで理解できない。イヤホンをつけてテレビを楽しんでいる。いい若いもんがゲームに夢中になっている。赤鉛筆を舐めなめ〇とか△を書き込んでいた手が競馬情報のサイトを開くキーボードを叩く指に替わっている。単行本に替わって画面を流れる推理小説の文字を追っている。

それにしても以前は分厚かった使用説明書が随分と薄っぺらになった。基礎・基本のマニュアルだけなのだ。それだけ携帯電話が日常生活に浸透したということなのだろう。女房でさえ、たまたま同じメーカーのものだったとはいえ講釈がうるさい。釣り情報に欠かせないピンポイントの天気予報や波情報、潮の干満まで引き出してくれる。自分では流行の先端を行っているつもりなのだろう。フンフンと曖昧な返事をしていると、分厚い説明書を渡されてチョンとなった。

帰りにフィッシュランド滝川店に立ち寄る。釣り大会前に3泊4日の出張を控え、仕掛けの準備に今から精を出しているのだ。ホッケ用仕掛けにと望んだチヌ6号がない。店頭には5号も7、8号も並べられているのに……。天秤仕掛け作成用ステンレス線1.0mmを購入する。ヘッドランプの明かりが心許なくなっていたので、電池を入れ替えたりしていじくっていると、遠近切り替え用のネジが甘くなり根元がカタカタする。それでLEDが36個もついたヘッドランプを購入する。現在使っているLED6個のものどちらが明るいかを店員に尋ねたが「多分」という枕詞がつく。ヘッドランプは様々な種類があり照度が明示されていたが、レンズで焦点を絞り遠くまで明かりが届くヘッドランプには2倍の値札が付いていた。ハリス用テグスとして使用しているシーガーエースが無いのでシーガーに格下げした。百均で買いそろえた仕掛け入れ等の様々な収納パックは硬くて嵩張るので、ビニル製の軟らかいバッグを購入する。30年も前に買い揃えた25号竿の竿先が折れていたのを30円払って修繕してもらった。まだまだ使えそうだ。店を出るときに北海道の釣り紀行文(積丹特集)創刊号となるパンフレットを頂いた。心を揺るような広告文字が並んでいたが、じつと耐え忍ばなければならなかった。

今回はリュックから一新して荷積みキャスターに2つのバックンを括り付けてみた。釣行を想像しながらニヤケながら居間で担いでいるのを見留めた女房が、「私はどう？」と背中に負ぶさってきた。重たい素振りを見せないで「釣行の荷物と同じくらいだ」と言ってやると嬉しそうにしている。「お前が軽いのではなく、釣りの荷物が重たいのだ。」とは恐

ろしくて言えそうもない。釣り装備も近代化したいのだが小手先ばかりでままならないようだ。

年寄りの冷や水

今回は総勢24名の参加者である。前野会長による恒例のご挨拶があったのち、例の如く晩餐会となった。私は前回大会の帰りのバスで海岸線を見ながら次回は歌島平盤に入ることを宣言していた。アレコレと考えて躊躇するよりも宣言してしまえば気楽だと思うのだ。寿都を過ぎて矢追、山中、弁慶茶屋へと仲間が向かっていく。

歌島平盤への下り口はいくつかあり、遠回りにはなるが赤色回転灯の所から比較的平坦な道を下っていけばよいと聞かされていたので、その赤色回転灯を捜すが見当たらない。その内に歌島漁港が見えてきてしまった。運転手がベテランだといいいのだが、新人となるとこちらも不安になってしまう。釣りバスに乗っているのは釣り場に明るい人間ばかりでない。地図を便りに暗い中で捜すのだが、自分では見つけられないことが多い。ベテラン運転手だと自分の下りたいところを告げるだけで、バスを停めてくれるのだが、新人ではそうもいかない。前はスタート地点である須築漁港を通り越してしまい、気づいた時には切梶付近だったので戻ってもらったのだ。今回も幾度となくバスに引き返してもらったり、会員自身が諦めたりしてしまったのだ。皆が少しでも早く釣り場に立ちたいという思いで高速料金を払っているにも関わらず……。今回、私が逃してしまった赤色回転灯を帰りに確かめると灯りはついていないがきちんとあったのだ。

急遽、釣り場をワスリに変更する。ワスリへの道程はこの年齢には限界に感じていたが、思い当たる場所もないのでやむなく向かうことにしたのだ。大平川橋を抜けたところで下ろしていただく。用意したキャスターのお陰で難なく坂下りの入口にあるコンクリートブロックまでたどりついたが、荷物をブロックに上げようとするすると肩紐の留め具が壊れてしまった。留め具は修繕しようもなく、応急措置として肩紐をキャスターのバーに縛り付けた。

そしてまた、途中の溝で転んでしまった。昨年は難無く通り過ぎていたような溝である。体力の衰えは1年とはいえなく加速度的にそのスピードを増していくように思う。その時に新調したキャスターの一部を岩にぶつけたらしくよく見ると金具の一部がグニャリと曲がっていた（右図）。Mede In China の優良品「耐荷重50kg」はやはり肩唾物



だった。この次の釣行には使えそうもない。

さらに、背負った竿ケースのバンドを頭から抜こうとするとヘッドランプが頭から外れて落ちてしまった。カチャンと岩に当たってカバーが飛び散った。それが海水に浸かって、ショボショボと暗くなっていく。予備のヘッドランプを取り出している間にも竿ケースが海水に浸かってしまっていて更に重たくなる。リュックの時には平らな岩棚がなくても気にならなかったが、丸い岩ではキャスターに付いた車輪が転がるために荷物を置きづらく、限界になるまで我慢して運ぼうとする。それが原因で何度も躓いては転んでしまう。

そして、転んだ後にハッと辺りを見渡すのである。暗がりでも誰も見ている者はいないのだが、転んでしまう自分のプライドが許さないのだ。入り組んだ海岸線を出たり入ったりしながら、ようやく、目立つ二つの立岩の先に見覚えのある岬があった。

体型にあったもの

バスを降りてから1時間以上もかかっただろうか。絶え絶えになった息を整えてから、磯周りのカジカを狙ってイカゴロ天秤仕掛けの第一投をようやくやっつとで打ち終える。ホッケが食い渋っているのだと思われるチョコチョコとアタリが続くが食いつかない。腕の長い天秤に替えるとローソクボッケが上がりだした。ホッケに混ざってカジカ、ガヤ、ソイ、ハチガラと小物が続く。その内にホッケが湧きだしたので、イカゴロ・コマセ仕掛けから2本バリ仕掛けに替えて遠投投げ分けたが、小物ばかりである。

竿先を突っ込む大物のアタリがあった。手応えを感じながら獲物を上げると35cmほどのソイである。遠投の竿にもよいアタリが出て竿先を突っ込むのだが途中の高い根に潜り込み抜けてこない。竿を立て高く掲げて高速でリールを巻いたり、糸をゆるめて時間をおいたりするのだがアブラコと思われるものは引っ張り出すことが出来ず、自分の技術の未熟さを感じさせられた。

帆船は向かい風でも味方につけて走るといふ。逆風も、順風も、人生の推進力にできるはずなのだ。風のない時は、風が吹くまでじっと待つしかない。暴風のときは、帆を下ろして船の強さを信じて耐えるしかない。今の自分は帆を下ろすしかないのだ。

帰りの道程も小物ばかりだがホッケの数だけは釣ったのでバツカンが重くて難儀した。釣りバス待ちで大平川平盤を望みながら、このワスリにはもう来ることはないだろうと痛めた腰や足をさするのであった。

審査結果

優勝	嵐 光博	1 3 7 3 点	(アブラコ495mm+カジカ 370mm+5080g)	寿都矢追
準優勝	小野田正男	1 2 5 2 点	(アブラコ455mm+ホッケ 355mm+4420g)	寿都山中
3位	前野達志	1 1 6 8 点	(アブラコ433mm+カジカ 353mm+3820g)	寿都矢追
4位	大前健治	1 1 5 4 点	(アブラコ435mm+カジカ 365mm+3540g)	歌 島 川
5位	西川絃一	1 1 3 1 点	(アブラコ430mm+カジカ 371mm+3300g)	寿都矢追
6位	吉井 博	1 1 2 0 点	(アブラコ431mm+カジカ 335mm+3540g)	弁慶茶屋
身長優勝	中江正美	1 1 7 7 点	(アブラコ479mm+ホッケ 350mm+3480g)	軽白平盤

審査では、例の如くピンコばかりでだめだといっていたはずの嵐氏、小野田氏、中江氏、前野氏が獲物をゴロゴロと出した。

私は、今年の年間大物賞の基準が変わったことから、提出魚について悩むことになった。周りの釣果を気にしながら魚の計量のお手伝いをしていたのだが、自分の魚が出て来た時にはやはり躊躇してしまった。婿は38cmのアブラコである。嫁に37cmほどのホッケ、36cmほどのカジカ、35



本日の釣果

cmほどのソイのどれを選ぶかである。今後の大会は太平洋に移っていくので、ソイを嫁として提出しておけば魚種別年間大物賞の可能性が高いのだ。本大会の成績か、年間魚種別大物賞かのどちらを選ぶかである。今回の状況を見れば高い点数はとれないのは明白で、7回の内の5回で競う年間成績では捨て点のはずだ……。みんなから「早くしろ」といわれた途端、頭が真っ白になってカジカを嫁としてしまった。後から点数の集計表を見ると、はじめに標記されたソイ35.3cmに2本の取り消し線が乱雑に引かれて、カジカ35.8cmと記録されていた。5mmの長さは今回の成績順には全く関係のない数字だった。

お客さんとして乗っていただいた交縁会幹事長の岩本氏に昨年の釣行回数について尋ねてみると、年間35回ほどでそのほとんどが大会釣行だという。冬は大会が開かれていないことから考えると毎週どこかの釣りバスに乗り、竿を出していることになる。しかも、釣り上げた魚はほとんど食べないので隣近所にあげているという。私なら今日のようなソイを釣り上げた途端、夕食を飾るプリプリのソイの刺身を想像して涎が出てくるのだが……。

また、使っている道糸の話から竿の話になったので、竿はどのようなモノを選べばよいのかを尋ねてみた。さすがスポーツ新聞の記者である。彼は、「オモリや仕掛けとのバランスのとれた竿、狙う魚に合った竿、釣り場の状況にもよるので、その場に応じて竿を使い分

けている」と言った後「いろいろと講釈されるが基本はその人の体型にあった竿が一番良いのだ」とおっしゃる。「老いの冷や水」を考えると、年齢にもあったものと諭されているように思わずウムと肯いてしまった。



第2回大会入賞者

前列左より準優勝：小野田正男、身長優勝：中江正美、総合優勝：嵐 光博、3位：前野達志、後列左より、4位：大前健治、5位：吉井 博



提出した婿のアブラコと、ソイから替えてしまった嫁のカジカ